



この物語に登場する本

『ポケットのはらうた』 くだらななおこ詩 ほてはまたかし画 童話屋

『また すぐに会えるから』 はたちよしこ詩 大日本図書

『オーパル ひとりぼっち』 オーパル・ウィットリー原作

ジェイン・ボルタン編 バーバラ・クローニー絵 やぎたよしこ訳 ほるぷ出版

ぬすまれた時間と

金色のパン

工藤純子

「ナイツシューッ！」

青空に、うおーっと歓声かんせいがわきあがった。

「やったぜ、和弥かずや、逆転ぎやくてんだ！」

「よっしゃー！」

和弥かずやは、こぶしをにぎりしめ、ガッツポーズをした。

六年生になつてはじめての試合で、シュートを決めたのがうれしくて、サッカーグラウンドを走りまわった。後半で同点に持ちこみ、ラスト数分ぎやくてんで逆転ぎやくてんのゴールを決めるのは最高の気分だ。

ピーッと笛が鳴り、チーム全員、空に向かってこぶしをつきあげた。

「じゃーなー」

地元のサッカーチーム、レッドフェニックスの仲間に手をふって、和弥かずやは家に向

かった。応援に来ていた母さんが、「今日はごちそうにするね」と言って、先に帰ったから楽しみだ。

「あれ、卓？」

同じサッカーチームの卓が歩いてきた。振りむいたその手には、単語帳を持っている。

「よお、和弥。試合、どうだった？」

卓は、当たり前のように聞いてきた。泥だらけのユニフォームを見れば、試合の帰りだってことは、ひと目でわかるか……と思いつながら、和弥は親指をつきたてた。

「バッチリ勝った！ それよりおまえ、最近練習に来ないし、どうしたんだよ」

「ああ……」

卓は、少し気まずそうな顔をした。

「監督が、やめるなって言うから、名前は残しているけど……来年の二月まで練習に出られないから、やめたようなものかな」

「どうして？」

和弥は眉をよせた。学校はちがうけど、同じ六年生だし、二年生のときからいっしょにがんばってきた仲間だ。卓がサッカーをやめるなんて信じられない。

「ごめん、言おうと思ってただけ……実は、中学受験をするから、塾に行く日を増やしたんだ」

「受験？ サッカー、やめんの？」

和弥は目をまたいだ。

「うん」

「マジで？」

「将来のこと、ちゃんと考えろって、親もうるさいし」

「将来？」

卓がそんな言葉を口にするのが不思議だった。

「このままサッカー続けても、先が見えてるし。和弥だって、まさか本気でサッカー選手になれるなんて思っていないだろ？」

え……と、言葉につまった。